

# G・T・ラッドの講演をめぐって（一）

——迂路をとって漱石論へ——

大塚達也

ここに紹介する人物はジョージ・トランブル・ラッド（一八四二—一九二二）といい、明治の『哲学雑誌』によれば、彼は日本に三度来訪し、そのたびに各所で講演を行なっている。『哲学雑誌』の「雑報」「批評」「彙報」欄のラッド紹介記事は12にのぼるが、ここではまず、彼の輪郭を概説している事典の引用から始めたい。

① 武内 博編著『来日西洋人名事典』（一九八三年三月、発行所日外アソシエーツ株式会社、発売元紀伊國屋書店）

このラッドの学統を概略紹介したものに、今田恵の『心理学史』がある。

② 今田 恵著『心理学史』（一九六二年八月、岩波書店）

さらにウイリアム・ジェームズの次の一節にも注意したい。

③ W. ジェームズ著『心理学（上）』（今田 寛訳、一九九二年十二月、岩波文庫）

心理学の定義は、ラッド教授の言うように意識状態そのものの記述および説明というのが最もよい。意識状態とは、感覚、欲望、情動、認知、推理、決断、意志などのようなものである。もちろん「説明」と言うからには、その原因、条件、およびその直接の結果などを、確めることができる限り研究しなければならない。（ゴチック・側線とも訳書原文）

さてここから『哲学雑誌』に移れば、第七卷第六五号（明治25年7月）の「雑報」欄に「米国「エール」大学主任教授「デヨージ」、チ、ラッド」氏は我邦風光の美を見んとて此度来遊せらる氏は……」云々と彼の経歴を紹介した「○「ラッド氏」の来遊」の記事が見える。そして末尾には「我邦に來着の後直ちに同志社の招きに応じ宗

教学の講義を為す当地に來遊の上は哲学に関する演説を為すといへば其人を見るも近日にあらん（六月廿五日起稿）」とある。これがラッド最初の來日である。正確な日時は日本側資料では不明だが、一応の推定は出来る。

④ 同志社記事・総長報告（その一）「一八五 同志社報告（明治三十五年度）」（『同志社百年史 資料編一』、一九七九年一月）

昨廿五年ハ先ツ概シテ平穩ナル進歩ノ年ト云ハザル可ラズ、此年中特書スベキ事件四アリ、一ハエール大学教授博士らつと氏ノ來遊、二ハ理科学校中藥学科ノ新設、三ハくらるく紀念神學館ノ新築ニテ四ハ社員山本覺馬氏ノ死去ナリ

是ヨリ先キ教員會ニ於テ毎年歐米ヨリ一名ノ學士ヲ招聘シ講義ヲ依頼スルコトヲ議決シ其費用ノ支出ヲ米國伝道會社ノ照會ヲ經テ有志者ニ頼依スルコトヲ図リタレトモ此議ハ種々ノ故障アリテ遂ニ行ハレザリシガ幸ヒ當時在米ノ森田氏ヨリらつと氏日本來遊ノ意アル事ヲ報ジ來ラレタレバ直ニ之が招聘ノ手續ヲ為スニ至レリらつと氏ハ六月二日京都着翌日ヨリ其講義ヲ始メ十七日ニ至ル、毎日一回都合十二回ノ講義ヲナシ宗教哲學ノ大意ヲ述ベラレタリ生徒教員一同其深遠高尚ニシテ且ツ公正中庸ナル哲學ノ講義ヲ聴キ裨益スル所少カラザリシ浮田和民氏が明快ナル弁ヲ以テ終始通訳ノ勞ヲ取ラレタルハ一同ノ厚ク鳴謝スル所ナリ（傍線―引用者大塚）

右の記事から分かることは、G・T・ラッドの初の日本來訪が実

現したのは、同志社の欧米のおそらく神學者たちの招聘計画によるものであったこと、またすでに六月一日には入港検疫を済ませていたであろうということである。ただし、講義概要を記録したものは現在までのところ見つからない。一方、『哲学雑誌』に「当地に來遊の上は哲学に関する演説を為す」「其人を見るも近日にあらん」と予告のあった文科大学の方には、ラッド講演の概要を知る資料が残されている。

⑤ 元良勇次郎「ラッド氏ノ知覚論ヲ評ス」（『哲学雑誌』「批評」欄、第七卷第六六号、明治25年8月）

米國エール大學教授ラッド氏ハ去ル四日文科大學教場ニ於テ哲學會員ノ為メニ知覚論ヲ講義サレタリ、今其大意ヲ左ニ記シ併セテ之ニ對スル愚見ヲ記サントス、

（中略）

前述ノ講義大意ハ余ノ筆記ニ基クモノナレバ詳細ノ点ニ於テハ或ハ演者ノ意ヲ誤解シタルノ点ナキヲ証スル能ハズト雖モ大体ノ点ニ於テハ誤解ナキヲ信ズ、今二三ノ点ニ就キ愚見ヲ記シ以テ読者ノ參考ニ供ス、

第一、知識ハ純然タル感覺ノ結合ニ非スシテ心ノ之レト共ニ働クノ必要ナルコトヲ説ケリ、愚考スル所ニヨレバ心ハ何物タルヤノ論ハ古今ノ哲學者ヲ煩ハシ尚ホ今日ニ於テ確定セザル問題ナリ、而シテ実験學派ハ感覺ノ結合ヲ以テ心ノ基礎ト為シ超然學派ハ心アリテ初メテ知覚ノ存在シ得ルヲ主張ス、之ニヨリテ

考フルニラッド氏ハ生理的心理学」ノ著者トシテ米国ニ其名ヲ知ラレタル人ナリト雖モ実験派ニ属スル人ニ非ズシテ寧ロ超然的主義ヲ取ラルゝガ如シ、

第二、氏ハ純然タル感覚ト知覚トノ區別ヲセラレタリ、然リト雖モ知覚ナキ感覚ハ感覚ニ非ズ、感覚ト知覚トノ區別ハ其複雑ナルコトノ度ニ於テ差違アルノミ、素ヨリ心理学ノ説明上仮リニ其區別ヲ為シ能ハザルニ非ズト雖モ感覚ニハ心ヲ要セズシテ殊ニ知覚ノミニ其必要ヲ説カレタルハ余ノ解シ能ハザル所ナリ、（第三・第四下略）

ところで漱石は、明治24年7年から明治26年10月まで『哲学（会雑誌）』の編集に従事している。号数でいえば、第55号（明24・9）から第80号（明26・10）と推定されている（上田正行『哲学雑誌』と漱石）（『金沢大学文学部論集』、昭63・2）。この事実から、漱石とラッドとの直接のあるいはその学説との間接的な接触が推測できるであろう。また、北村透谷に次の如き短文があり、それが当該知覚論を指すか定かでないが、ラッド講演の評判は上々であったようだ。

#### ⑥ 本年の夏期学校

は例年よりも有益なる講話ありたりと出席したる人は語れり。

ラッド教授の講義元より出席者に満足を与へたる事多々なりしならむ。（下略）（明治25年8月28日「平和」第五号）

G・T・ラッドの二度目の来日は明治32年である。

#### ⑦ 『哲学雑誌』第拾四卷第一四九号（明治32年7月）

○ラッド博士の来朝　今を去七年前一度我日本に渡来せられたる、米国エール大学哲学教授ラッド博士は今回世界漫遊の途次再び本邦に來遊せらるゝ由にて、其節は東京帝国大学及神田一つ橋帝国教育会講堂に於て講演せらるゝ筈、其中東京帝国大学に於ては来九月廿五日より十月七日迄（土曜日及日曜日を除き）、毎日午後四時より心理学に關して講演せらるゝを以て、同校学生及生徒に聴講を許さるゝ、次に教育会講堂に於ては、教育学に應用したる心理学に就て、来る九月十一日より向ふ十一日間、毎日午後四時半より六時半迄二時間宛、開講せらるゝ由にて、聴講志願の者は三百名を限り入場許可せらるべし、但し申込規限は七月三十日までにて聴講料として二円を納め入るゝを要すと、博士の今回の講演は殊に日本教育者の為めに講せらるゝものなれば、其教育家諸氏の為め大なる裨益を与ふるは明かなるところ、宜しく奮ふて來聴せらるべしと、尚博士は来八月十七日香港丸にて桑港出帆、九月五日横浜着の由、

講演内容については稿をあらたにして論じたいが、ここでは取りあえずラッド来日の紹介記事を掲げて、彼の足跡を辿っておきたい。

#### ⑧ 『哲学雑誌』第二百三十三号（明治39年7月）

### ○ラッド博士の来遊

本邦人にはおなじみの同博士は近頃或る所へ書を寄せられ、秋冷の候を期し第三回目の来遊を計画せられ居ると云ふ。而して今回は大約一ヶ年程滞在の見込にて、其の目的とせらるる所は、仏基再教が那辺迄一致し得るかを研究せんとするに存し、其れが為めには多くの仏教者と親交し。互に胸襟を開きて研究したく、又其の為めには先づ仏教者に向て講義を試みたしとの事なる由。誠に面白き企てと云ふべきなり。されば本邦の仏教家と言はず、一段の学者は、ともなく偏狭なる思想を去りて、大に共に研究すべきものなり。我邦の時勢は既に變じ来れり。社会の情状と云ひ思想と云ひ、博士の如き比較的に本邦の事をよく了解し居らるる人には、又一層の興味あるならん。然るに翻て思ふ我邦の仏教者の内に果して博士の企画を満足せしむるに足るの人あるや。我仏教家の内に其の人なしと言ふにあらず、されども碩学博士の如きも、矢張西洋的思想の人なり、東洋的思想とは根本的に相違せる或るものゝ存するを以て、よく此点を認識して博士の希望を満足せしむる人に至りては、或は恐る稀有ならんを。余輩は斯る心配の無用たり得ん事を祈る。博士の来遊の如き事甚だ小なりと雖も、我等の眼には大事と映ずるが故に斯くは記すなり。

G・T・ラッドの我が国での講演の代表的なものはすべて翻訳されている。その内容等については稿を新たに起こしたい。

(岩見沢校)

ランド Ladd, George Trumbull 1842—1921 アメリカ人教育(東京大学等学術講演：心理学) 外交(朝鮮問題日本政府顧問)

1842年1月19日アメリカ合衆国オハイオ州ペーンズビルで生まれた。ウェスタン・リザーブ大学を卒業、ボードウィン大学の哲学教授に就任した。のちイエール大学に転じ、1900年には名誉教授に推された。アメリカ心理学会を創立し、さらに心理学に關して多くの著作を発表するなどアメリカ心理学界に大きな足跡を残した。1892年から1899年にかけて3度にわたり来日、各地で講演を行ない多大の影響を与えた。さらに伊藤博文の顧問として朝鮮に渡りこれを補佐した。日米親善にも尽力し、こうした彼の功績に対して日本政府より勲二等重光章が贈られた。1921年8月8日アメリカのニュー・ヘヴンで死去、遺言により鶴見の総持寺境内に分骨され、彼を偲ぶ人達の手により墓碑が建立された。「墓碑」横浜市鶴見区鶴見総持寺。

(原文構書)

〔文献〕(省略)

ジェームズの「心理学原理」が出る3年前に「生理学的心理学」(Elements Physiological Psychology, 1887)を著したことによって、開拓者の位置を得たのはラッドである。

ラッド(George Trumbull Ladd, 1842—1921)は、シエラムスと同年に生まれ、アンドーバー神学校を卒業し(1869)、10年間牧師をした後、ボードイン・カレッジ(Bowdoin College)の哲学教授(Professor of Mental and Moral Philosophy)

phy)となり(1879)「当時の一般の考えに従って、哲学の入門として心理学を研究し、そこで精神系統と心的現象との関係の研究を始め、1881年イエール大学に同じ名称の教授として招かれた後も継続し、生理学者サッチャー(Thatcher)の協力を得て実験的研究をした。1887年、「生理学的心理学」(Elements of Physiological Psychology)を出したが、これは当時の必要を満たしたため、大いに用いられた。ヴントの著書のほかでは、ベインやスペンサーはすでに古く、サリーのOutline of Psychologyがあつたばかりで、アメリカでのデューイのPsychologyは哲学的であつた。故にラッドはアメリカのサリーであるといわれる。内容的にも生理的な部分は勝れていたので、1911年にウッドウォースによって改訂され、一層その価値を高めた(中略)

ボーリングは、ラッドの心理学は、ヴントの生理学的心理学とはちがって、機能主義的であり、アメリカ心理学はシカゴ学派以前に早くから機能主義的であつたと指摘している。

すなわち、(1)心理学における自我(self)の必要を認め、意識を自我の活動と考える。最も簡単な感覚さえも、能動的機能と受動的 content との両方の性質を備えている。(2)意識の機能は問題の解決である。すなわち生存のため、環境へ適応する機能をもつ。(3)適応ということは、活動が目的性をもつ(teleological)ということである。(4)したがって心理学は、実践的用途をもち、応用心理学に進むことができる。

(原文構書)